

ISSN 0910 - 2396

野鳥たより

—北海道—

第 6 1 号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 昭和60年9月21日



オオヨシキリ '80. 6. 5 上野幌 撮影 富川 徹



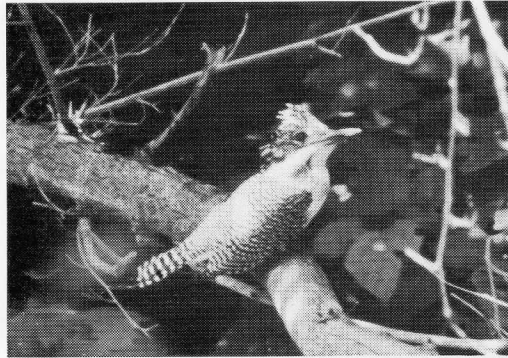
もくじ

私の探鳥地 (千歳)	2
久遠地方の鳥	3
野幌原始林の思い出	6
我がフィールドは今	7
北海道のメボソムシクイ	7
探鳥会報告……植苗・東米里・福移	9
鳥学コーナー	11
探鳥会案内	12
鳥民だより	12
編集後記	12

私の探鳥地

②

千歳 道川 富美子



〔ヤマセミ〕

どこそこに何とかの鳥がみられたとか、いるらしい——との情報が、私達 (たいてい二人ですので) の次の休日の行き先を決めてしまいます。姿を見せてくれる所を想像しただけで、自分でもわけわからず興奮して出かけるまで落ちつきません。その日は「まずいない、と思いなさいよ。」と念を押されてから出発します。

そうでない休みの日は、歩きなれた野幌森林公園か円山公園へ出かけます。ゆっくりできる日は、弁当を持って野幌へ。怪しげな天気の時や、ちょっと時間が足りない時は円山へ。たとえ鳥さんがいなくても、樹や草花があり、地面があつて、雲が浮かんでいれば、私はそれでうれしいのです。

毎年飛石連休の一日は、千歳へ出かける事にしています。千歳バスターミナルから支笏湖行き朝一番に乗り、「ふ化場入口」停留所まで運んでもらって、後はのんびり戻ります。降りてすぐ、ナニワズの咲く明るい木立の中にカラ達の声聞き、今年はビンズイの囀る姿がみられました。王子製紙第4発電所へ通じる路へ入ります。若葉が広がり、ひんやりとして、残雪の隣りには他にも増して色彩やかな福寿草が見事です。土の上に降りて食事のベニマシコの群に会い、前へ進

めなかった時もあります。マヒワ・クロジ・ウグイス・ウソ・アマツバメ……切りないです。つき当りは“立入禁止”の札が立っていますが、管理のおにいさんに頼めばダムの淵まで行けます。ヤマセミの巣穴を教えてくださいました。

もどって、今度は千歳川に添って続いているサイクリングロードを利用して歩きます。高速道路を過ぎた頃から、対岸が崖になっていて水浴びしている鳥達があります。近寄れないのがわかってか、隠れもしないでいる様子がかわいいです。川岸で休んでいると決めてカワセミが現われてくれますし、環境が変わっていなければあたりまえの事なのでしょうが、前年と同じ所にモズがいて、ノビタキがいて、コガモが昼寝しているのが何だか不思議です。

最後は青葉公園を、薄暮くなるまでうろつきます。遊歩道ではキジに驚ろき(キジを驚ろかし)、また2羽のトラツグミが10m程の所で先導してくれた時もありました。

こうして、一日がかりの探鳥を楽しんでいます。まだまだ、近い所から順に出かけたいと思っています。色々聞かせて下さいませ。

(札幌市東区北32条東6丁目)

久遠地方の鳥

小山政弘

久遠郡大成町は、松山管内のちょうど奥尻島の真向かいに位置する。松山管内での鳥の観察記録は決して多くはないので、ささやかな観察ではあるが、一応まとめておこうと考えた。地形的に特色を見つめれば、山がそのまま海に飛び込んだ感じなので、平地はまれである。山林を構成する樹木の優占種は、ブナ・モミジ類で、スギの人工林が多く目につく。海岸は、そのほとんどが岩磯で、シギ・チドリ類の好む砂浜はない。町内の河川はすべて溪流である。

— 特筆すべき鳥相 —

何といっても、わが国に生息するホトトギス科の鳥が勢揃いする点であろう。特に囀りだけで比較すれば、ホトトギス・ツツドリ・カッコウ・ジュウイチの順に多く耳にする。

ハシブトガラは、私が在住した三年間一度も観察できなかった。コガラとの区別に自信があまりないのだが、その鳴き声はコガラ以外のものではなかった。

カラ類では、ヒガラを観察する機会が多くて、その個体数も道央地方のカラ類混群に比較すると多いように思える。

秋の山林では、ミヤマホオジロがかなり観察されるし、数羽のジョウビタキ雄群を数日間観察することもあった。前種については、春季にも観察された。

海上の鳥は、春秋の移動期に多種、多个体群が観察されるが、特に初夏には、オオハムの十数羽群が海岸に近づくことがある。

カモメ類を見つめると、1982～1983年の例では、ウミネコは1月26日から3月11日の間は観察されなかった。同じように、5月～6月にも、ウミネコはほとんど姿が見られない。

海岸にはイソヒヨドリの姿が目立つ。約100メートル間隔で雄個体が観察される。この鳥も、冬期間は海岸からは姿を消し、どこかに移動するようだ。

秋には、海岸伝いに数羽の群で移動するアオバトが観察されるが、水辺において海水を飲む光景を数回観察している。

まれな観察として、マナヅルの番(つが)いが、1983年4月1日から15日間農家の給餌を受けた。この年は、大成町では記録的な大雪が続き、そのような気象の変異がこのマナヅル渡来と無縁ではなさそうである。

1982年10月には、4羽のシマアオジ渡り群を認めた。前日はかなりの嵐であったことから、あるいは一過性の小群であったかも知れない。それ以後は二年間観察されていない。

以上、自宅の周辺や、通勤途中だとか、少し散歩にかけたおりの観察だけのデータであるから、綿密さは期待できない。かなり雑な観察記録だと認識していただきたい。

久遠地方で生息が確認された鳥 (1982～1985)

(129種)

種名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
アビ			○									
オオハム			○			○					○	
シロエリオオハム				○								
ハシジロアビ			○									
ハシジロカイツブリ			○									
ミミカイツブリ			○									
アカエリカイツブリ			○									
ミズナギドリ科SP			○	○	○	○						
ウミウ	○	○	○	○	○				○	○	○	○
ヒメウ											○	

種名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
オオヨシゴイ					○				○			
チユウサギ				○								
アオサドリ				○	○							
オマカガモ	○	○	○	○	○				○	○	○	
カコガモ				○	○				○	○		
ヒドリガモ			○	○								
オナガガモ			○	○								
オホシハジロ			○	○							○	○
クロードキンク	○	○	○	○							○	○
ビロードキンク	○	○	○	○	○					○	○	○
シノドリガモ	○	○	○	○						○	○	○
ホオジロガモ			○								○	○
ミコアイサ	○	○	○	○							○	○
ウミゴビ			○							○	○	
トオジロワシ	○	○									○	○
オオオワシ	○										○	○
オオオカタ									○		○	○
ハノイカタ	○										○	○
クマスタ					○							
ハチヤブ					○				○			
チゴハヤブ					○							
チヨウゲンボウ								○				
エゾライチヨウ												○
コウライキ				○								
マナヅル				○								
コチドリ						○						
シロチドリ					○	○			○	○		
キアソシ				○	○	○	○	○	○	○		
イソシ				○	○	○	○	○	○	○		
オオソリハシ				○	○	○	○	○	○	○		
オオオジシ				○	○	○	○	○	○	○		
アカエリヒレ				○	○	○	○	○	○	○		
ユリカモ									○			
セグロカモ	○	○	○	○					○	○	○	○
オオセグロ	○	○	○	○					○	○	○	○
ワシカモ	○	○	○	○					○	○	○	○
シロカモ	○	○	○	○					○	○	○	○
カウミ			○	○			○	○	○	○	○	○
ウツユビ	○	○		○							○	○
ウツミガ	○		○	○							○	○
ウツミス			○	○					○	○	○	○
キオジ			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
アオウ					○	○	○	○	○	○	○	○
ジュウ					○	○	○	○	○	○	○	○
カツ					○	○	○	○	○	○	○	○

種名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
ホトギス					○	○			○			
オコノハズ									○	○		
フクハロ									○	○		
ヨクタ						○	○	○	○	○		
アマツバ									○	○		
ヤマセウ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
アカシヨ								○	○	○		
カワセウ									○	○		
ヤママゲ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
クマゲ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
アカゲ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
オアゲ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
コゲ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ヒツバ				○	○							
イツバ				○	○							
イワバ				○	○							
キセキ				○	○							
ハクセ				○	○							
セグロ				○	○							
ビロン				○	○							
ヒヨ			○	○	○		○	○	○	○		
モレ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
カワジ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
カワサ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ジウ				○	○	○	○	○	○	○	○	○
ノビ				○	○	○	○	○	○	○	○	○
イト				○	○	○	○	○	○	○	○	○
トラ				○	○	○	○	○	○	○	○	○
ク				○	○	○	○	○	○	○	○	○
アツ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ヤブ				○	○	○	○	○	○	○	○	○
ウグ				○	○	○	○	○	○	○	○	○
コヨ						○	○	○	○	○	○	○
オヨ						○	○	○	○	○	○	○
エゾ						○	○	○	○	○	○	○
セン						○	○	○	○	○	○	○
オオ					○	○	○	○	○	○	○	○
エナ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
コガ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ヒガ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ヤマ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
シジュ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ゴジュ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
メ				○	○	○	○	○	○	○	○	○
ホオ				○	○	○	○	○	○	○	○	○
ホオ				○	○	○	○	○	○	○	○	○
カシ				○	○	○	○	○	○	○	○	○
ヤマ				○	○	○	○	○	○	○	○	○
シマ				○	○	○	○	○	○	○	○	○
シア				○	○	○	○	○	○	○	○	○

種 名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
ク ロ ジ									○	○		
オ オ ジ ユ リ				○								
カ ワ ラ ヒ			○	○	○	○	○	○	○	○		
マ ヒ										○		
ベ ニ ヒ		○									○	
ベ ニ マ シ			○	○	○					○	○	
ウ		○	○	○								
イ カ ル					○	○	○	○	○	○		
シ				○					○	○	○	
ニューナイスズ					○							
メ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ス ズ		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ム ク ド		○	○	○					○	○	○	
カ ケ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ハ シ ボ ソ ガ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ラ ス	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ハ シ プ ト ガ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ラ ス	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

(釧路西高等学校勤務)



野幌原始林の思い出

門崎 和子

昭和46,7年頃は住まいも江別の大麻に有り子供も居なかったで、よくお天気が良いとおにぎりとおやつを持って、ゴム長で野幌原始林へ歩いて出かけたものです。40分位で現地に着き、バードウォッチングを始めます。

原始林に一步入ると団地には無い草や木、木の葉の匂いがして心を和ませてくれました。

初めのうちは鳥の鳴き声も聞き分けが難しく大変でしたが、ある程度鳥の区別が出来ると、耳からの鳥か聞き分け次に姿を双眼鏡で追う。自分の目でその鳥を確認した時は、とても嬉しくなります。そしてどんな動きをするかと、しばらく行動に見とれその可愛さに満足したものです。

当時は、お天気さえ良ければ週に1、2度は行って居たので遊歩道のコースはほとんど廻りました。行く度に今日は何のコースにしようかと楽しみだったものです。

四季各々の木々や草花の変化も楽しみの一つでした。一人で林内を歩いて居ると何人か同じ仲間と出会いましたがはじめは黙ってすれ違うのですが、何回目かには挨拶したり、声をかけたりして顔見知りが増えました。又営林署の人も時には声をかけて下さったりしました。

初めて耳にする鳥には胸をトキめかせ、目で見た時の感激は今でも忘れられません。思い出に残る野鳥としては、瑞穂の池で見たアカエリカイツブリ、他の場所でしたがキンクロハジロの白っぽい嘴、マガモの親子、アカショウビンの大きな赤い嘴、トラツグミ、ニューナイスズメ、コウライキジ、5.6メートル以内で聞くウグイス

の声、キクイタダキの動作など他にも沢山あります。

日照り続きの後行って見ると、当てにしていた池の水鳥の場所が、水が完全に無くなって草が現れ地割れた底が見えて、びっくりした事も有りました。又鳥の警戒の声にその方向を探して行くとヘビが巣に近づいて居たりする時もありました。

バードウォッチングをして居る時に困る事は、ラジオを聞きながら歩いている人と遠足の子供たちが団体で通る時です。珍しい鳥の居そうな場所ですと残念ですが、その場所をあきらめて他の所へ移りました。

子供が出来てからは、数える位しか訪れて居ません。その上52年からは住まいが広島町へ移り一段と遠くになってしまいました。

こちらですとバスを使って登満別から入るか、汽車とバスを使って百年記念塔の方から入るかになります。子供と行くと余り長い事歩かれませんし、話も多くなり、じっくりと鳥を探す事は出来なくなりました。どちらかと言うと草花や虫などを探すのが中心となり、その合間に声が聞こえたり、姿が目に入ると双眼鏡で見る感じになりました。それでも懐かしい鳥に会うと嬉しいものです。

去年も2回ほど行って来ましたが、真夏でしたのであまり鳥には会えませんでした、でも歩きながら子供たちに、こんな鳥がここに来たとか言う話をしました。

今はゆっくりと時間を考えないで鳥を求めて歩くことと冬の原始林を歩くスキーで訪れるのが夢です。

(札幌郡広島町緑陽町2丁目1-11)



我がフィールドは今 土田 光子

キチキチと、かたい木片をこすりつけるような音がする。昨日もこんな音がした。鳥の声？それとも川向かいの赤い屋根からの暮らしの音？私は双眼鏡胸にぶら下げ堤防の木立の中へ分け入りました。みずみずしい水草が小川の流れをゆるめています。何処かでバンが「クイーッ」と警戒音を発しました。いじめをするわけでもあるまいし、いいかげんに姿を見せてくれてもよいものを。恨み言を言ったら足元がすべり、よたっつてしまいました。大きくなるみの木の枝が手を差しのべてくれました。川上でコガモが5～6羽首をもたげて心配そうに私を見つめています。いいえ、ひやかしのまなこです。落ちたところで浅い川、命に別状あるまい。でもくやしけど若くないもんね。私は慎重に川べりを歩き夕日で赤く染まった新緑を眺めていました。と、ぎょっ!!大きく開いた真っ赤な鳥の口が双眼鏡いっばいに飛びこんで来たのです。夕日が更に生々しく口の中を赤く染め全身が燃えているように見えました。地球上にこんな鳥居たっけ？私のノーミソは音を立てて、目まいを始めました。おやっ!!キチキチの音が近づいて来ました。一瞬目を転じている間に赤い口の珍鳥？に逃げられました。音の正体も判かりません。私は混乱した頭で家へ引き返し、鳥友のH氏に電話しました。早速馳せ参じてくれました。燃えていたハト大の鳥が居ました。夕日のさしこんだ木立の間を縫うように飛び廻り、その後をスズメ大の小鳥が

キチキチと鳴きながら追いかけていたのです。「カッコウのやつモズに子育てやらせているね」H氏がさり気なく言いました。私は深いため息をし、二度三度うなづきました。そして、「ごめんね珍鳥でなくて」心の中でH氏に詫言いました。

それから数ヶ月後、蒲の穂の根元でバンがもったいぶりながら2羽の雛を見せてくれました。負けじと子だくさんのカルガモも雛を背負って現れました。息がつまる程嬉しかったです。

ここ伏古別川は住宅街ながら静かに野鳥の命を育んでいたのです。

翌年私は病の為、体にメスを入れられコバルト治療を受け傷ついた体で帰宅しました。なんと我がフィールドも大きな傷を受けていたのです。カッコウの雛の止まり木も、やかましくさえずっていたオオヨシキリのお気に入り木も、いっばい実をつけ、私に手を差しのべてくれたくみの木も根こそぎ切り払われていました。川底は深くえぐられ、バン達の命を育んだ水草や蒲の穂も跡かたもありません。タンポポの咲いていた土手にはパズル遊びの図の如く白い四角いコンクリートが敷きつめられていました。私の心の中に冷たい風が吹きぬけていきました。

(帯広市西11条北5丁目4 土田光子)

北海道のメボソムシクイ 藤巻 裕蔵

メボソムシクイは、不思議な鳥である。本州では亜高山帯の森林からハイマツ帯にかけて生息し、繁殖しているのに、北海道では渡りのときに姿を現すだけなのである。日本鳥類目録5版によると、この鳥は北海道で繁殖することになっているが、これまでの観察記録を見るかぎりでは、普通に繁殖しているとはいいがたい。また古くにも、繁殖する、しないの論争もあった。このことについては、百武(野鳥、1981年4月号)や川辺(ひがし大雪だより5)両氏がすでに述べているので、ここでは省略する。ただ、北海道東部では7、8月にさえざりが

聞かれたり、標識調査の際に幼鳥とおもわれる個体が捕獲されているので、もし繁殖するとすれば、知床ぐらいであろうと、私は考えていた(ひがし大雪だより7)。

しかし、道南地方、阿寒、北部の天塩山地における資料がないため、北海道全滅のメボソムシクイの生息状況については不明である。そこで、各地の皆さんの協力を得て、観察記録をまとめ、北海道におけるこの鳥の生息状況と繁殖について考えてみた。資料をお送り下さった方は次のとおりである：羽田恭子、橋本正雄、百武充、川辺百樹、小山政弘、中野高明、中尾弘志、松本光二、三

表1 メボソムシクイの観察・捕獲記録

地域	5月			6月			7月			8月			9月			10月			11月			
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	
胆振			2																			
後志																						
日高					1	2		1		1												
石狩					13	8																
空知					7	3	1															
上川					1	4																
宗谷		2	1							3												
十勝					21	11	2															
釧路	1	3			5	7	1															
根室							1															1
網走	1					1			1													

浦二郎、高野伸二、梅本正照。このほか、すでに発表されているいくつかの資料（原則として観察場所、年月日が明らかなもの）も用いた。観察記録が得られたのは、14支庁のうち胆振、後志、石狩、日高、空知、上川、宗谷、十勝、釧路、根室、網走で、他の3支庁からの記録は得られなかった。

春の渡り

メボソムシクイは、春に渡来するとよくさえずるので、生息していることがすぐわかる。春の渡りの早い例では、5月下旬の記録があるが、ピークは6月上、中旬である（表1）。この頃には、公園、神社や寺の境内、農耕地の防風林など、低い標高でもよくさえずりが聞かれる。6月下旬以降には記録は急に少なくなり、通過個体が少なくなることを示している。春の渡りは、この頃に終わるのであろう。なお、平取町二風谷では4～7月、10月に記録されている（長井博、北海道野鳥だより45）。しかし、4月という非常に早い例であるのに、観察日などについてなにも説明がない。今回北海道各地から集まった観察例からみても、4月という記録には疑問が残る。

夏の記録

渡りのピークが6月上、中旬にあるので、7、8月を夏としてみる。7月上旬には、日高では静内町高見の針広混交林（標高200m）、釧路では鶴居村の宮島岬とキラコタン岬の落葉広葉樹林で記録されているが、環境からみて、これらは遅い通過個体のようである。網走の例は、知床横断道路での記録である。

7月中旬の記録は、いまのところ宗谷だけである。これらは3例とも利尻島のものである。

7月下旬の記録では、日高は静内町ペテガリ岳1200m、網走は斜里岳ハイマツ帯、根室は計根別で標識調査の際に捕獲された幼鳥である。日高山脈ではペテガリ岳を含み、1978年に北海道の自然生態系総合調査の一環として鳥類がかなり調べられたが、7月にメボソムシクイ

はまったく記録されなかった。このほか、1931年7月に小林賢三が大雪山で1羽を採集した記録がある。

8月上旬の記録は、羅臼岳のハイマツ帯と遠音別岳のハイマツ帯（餌を運ぶ親が観察された）におけるものである。

秋の渡り

9月になるとまた記録が増えてくるが、これらはほとんど標識調査で捕獲されたものである。この結果からみると、秋の渡りは9月中～下旬がピークで、10月上～中旬には終わることがわかる。ただし、根室の9月上旬の記録のうち1例は幼鳥である。

結論

初めに述べたように、まだ北海道全域の記録が集まっていないので、まだはっきりとした結論をだすわけにはいかないが、一応現段階での結論を述べておこう。

以上に述べたように、知床半島では、夏にもメボソムシクイのさえずりがよく聞かれ、ハイマツ帯では餌を運ぶ親が観察されたことから、繁殖は確実である。またその周辺（計根別）でも、7月下旬と9月上旬に“南千島からはるばる渡ってきたとは思われないうぶ毛の残る幼鳥”（三浦二郎、ひがし大雪だより7）が捕獲されている。このことも、メボソムシクイが知床で繁殖していることを裏付けているものであろう。このほか、夏の生息状況からみて、繁殖の可能性があるのは、利尻島であろう。

大雪山と日高山脈では、いろいろの人が調査を行っているが、メボソムシクイの繁殖期と考えられる7、8月の記録が非常に少なく、繁殖については疑問である。なお、旭川市春光台で繁殖するという報告（山田良造、北海道野鳥だより33）があるが、詳しいことはなにも述べられておらず、この繁殖が確実かどうかについての判断ができない。

メボソムシクイは、北海道に6月上、中旬に渡来し、

その一部が岨床半島などで繁殖するが、多くは通過して
もっと北の繁殖地であるサハリンや南千島（ソ島の鳥学
者V. A. ネチャエフ博士によると、メボソムシクイは
サハリン東部、クナシリ島の爺々岳で繁殖しているとい
う）に渡るのである。

では、なぜ本州の高山帯で繁殖する鳥が、ごく少数が
北海道にとどまって繁殖するだけで、多くは通過してし
まうのだろうか。日本鳥類目録によると、北海道のメボ
ソムシクイは、本州のと同じ亜種であるが、さえずりが
本州で繁殖しているものと異なり、別亜種の“コムシク

イ”ではないかといわれている。この点について結論を
だすには、さえずりを録音して比較分析したり、標本に
もとづいて形態上、分類学上の検討をすることが必要で
ある。もし、北海道産のものがコムシクイ（この亜種は、
アムール地方、オホーツク海沿岸、サハリン、チュコト
半島などのソ連極東、シベリアで繁殖し、日本は通過）
だとすると、これまでに北海道で得られている記録は当
然のことということになる。

帯広市稲田町西2線13



植 苗

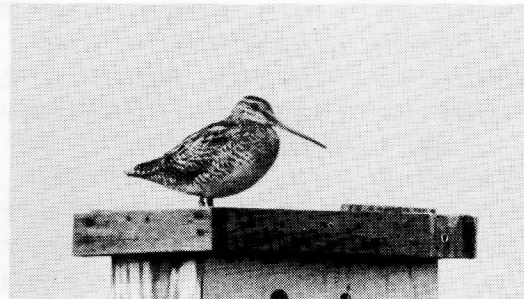
60.6.16 辻田 洋子

普段から山歩きが好きで山
菜や野草に親しんでいるほ
うですが野鳥の方は興味は
あっても身近に観察すること

もなく過ぎて来ました。今年5月下旬に郭公の鳴き声を
きいた時、あゝ今年からはもう少し鳥のことを知れたら
…せめて山を歩いている時に今、鳴いているのは何の鳥
なのか少しでも判るともっと楽しくなるだろうと思いま
した。それと職場の窓からも野鳥が眺められるのに何の
鳥かも判らずじまいなのも残念なことでした。新聞で今
日の参加を思い立ち、思い切って来てみました。想像以
上に楽しく過ごさせてもらいました。植苗の駅前に着き、
早速、ホオジロ、アオジを望遠鏡で見せてもらい、ゆっ
くりとウトナイ湖へ向かいました。もう樹々も緑濃くな
って仲々観察したり見つけるのは困難になって来たとの
お話でしたが会員の方は流石に耳も鋭く、今鳴いて
いるのは？あのあたりかな？と双眼鏡をたくみに駆使し
て進み教えて下さいます。やがて草原の中から可愛いら
しいコヨシキリの鳴き声がきこえ、黒い身体の中に鮮や
かな黄をまとっているシマアオジに出逢い、頬っぺが赤
いホオアカがススキの枝先に止まっていたり、頭の黒い
オオジュジュリン…、頭上にはトビの雄大な姿も見えま
す。ウトナイ湖は本当に野鳥の楽園の様でした。あちこ
ちで色々な歓声が上がっています。後になり先になって
遅々として進まないで観察続けるグループあり、マイ
ペースに自由気ままに観察している方ありで皆さん各々
に楽しんで野鳥や自然と語っていらっやいます。

行きの車中で会員の方達と偶然に同席して聞くとはな
しに聞こえて来た会話の中に今日はどんな鳥と出逢える
か楽しみだわ…ということばをきいて嬉しくなりました。
それはシラネアオイは去年のあの場所に咲いているかし
ら？もうヤチブキの花に逢えるかな…等、出掛ける時に
私も思うようなことと同じなんだなあと思ったからです。

折角教えて頂いても又すぐ忘れてしまいそうですがシマ
アオジの黒と黄の目の覚める鮮やかな色は当分頭から離
れないでしょう。今後も機会がありましたら是非参加し
たい思います。今日は楽しい瞬時を有難うございました。



〔オオジシキ〕

〔記録された鳥〕 アオサギ、トビ、キジ、コチドリ、
オオジシキ、キジバト、カッコウ、ショウドウツバメ、
ハクセキレイ、ノビタキ、ヤブサメ、エゾセンニュウ、
シマセンニュウ、マキノセンニュウ、コヨシキリ、ハシ
ブトガラ、シジュウカラ、ホオジロ、ホオアカ、シマア
オジ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、スズメ、ハ
シボソガラス、ハシブトガラス、コブハクチョウ、カモ
SP 以上28種

〔参加者〕 福岡研也・玲子・正樹、泉屋宣志・恵津
子、松井由紀子、澤田幸子、宮田 久、黒田聖子、荻
千賀、飯山五玖子、溝部泰子、柳沢千代子、森岡広光、
佐々木武巳、神崎みちえ、武沢和義・佐知子、園部恭一、
曾根モト、戸津高保・以知子、平井さち子、岩泉ゆう子、
井上公雄、玉山 武・久美子、新妻 博、関口健一、沢
田宏子、辻田洋子、羽田恭子、野々村 菊、長谷川涼子、
大町欽子、清水朋子、道川 弘・富美子、馬場
以上40名

〔担当幹事〕 関口健一、道川富美子
札幌市南区澄川2条1丁目 6の16

東米里

60.6.23

山田 れい子

東米里の探鳥会。毎度の事ながら探鳥会のある朝は、何か楽しい気分で目が覚める。生憎空模様は雨曇り、集合場所は東米里小学校バス停前、9時集合。先生方の紹介中霧雨が降り出す。学校から5分ほど歩くと、広い草原に民家が点在し野鳥には格好なすみか。まずノビタキが目に入る、黒いスーツにオレンジ色のブラウスを着て小さな体でよくさえずりよく飛び廻る雄はおしゃれさんね。雌は一步控えて目立たぬ風情。「あっノゴマ」の声に双眼鏡を覗くが仲々ヤブから出てこない「あの辺を見ていてごらん」の声にじっと待つ。何と真っ赤な蝶ネクタイをきちんと絞めて、これ見よがしに首を動かし尾をはね上げ、きどった姿。ノゴマには始めてお目にかかるのもう感激でいっぱい。風のせいかわりに鳴き声は耳に入らなかった。近くでカッコウが、円山周辺では毎年声も聞いたことがない。大きな鳥が二羽飛び立つ「あれ何ー」と叫ぶと「カッコウ」と声が返る。探鳥会はいいな。先生方がすぐ答えて下さる。本をめぐっているうちに鳥がいなくなる。そんな心配ない。

「オオジュリン、オオジシギ、コヨシキリ、イソシギ、ヒバリ」「ハクセキレイ」「カワラヒワ」さっと姿を現してあいさようを振りまく。エゾセンニュウ、ホオアカ、アリスイ、アオジは声だけ。赤モズの巣の近くで早めの昼食をとる。やはり貴婦人のアカモズ現れる。スリムな体に長い真っ白なベスト。その上にレンガ色のタキシードを着こんで、誇らしげに前後左右にと踊ってくれる。宝塚の誰かに似ていると思いつつながら、端正な体にうっとり見とれる。鳥合わせの頃にはお天気もやよくなり、12時過ぎに解散する。

会員でない私には、初めての方ばかりの探鳥会でした



〔ノビタキ〕

が、前からのお知り合いの様な雰囲気。お天気に恵まれない日でしたが、人と鳥にはたっぷり恵まれました。また参加させて下さい。

〔記録された鳥〕 アオサギ、トビ、チゴハヤブサ、キジ、イソシギ、オオジシギ、キジバト、カッコウ、アリスイ、ヒバリ、ハクセキレイ、アカモズ、ノゴマ、ノビタキ、エゾセンニュウ、コヨシキリ、ホオアカ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、スズメ、コムドリ、ムクドリ、ハシブトガラス、以上24種

〔参加者〕 古川春雄・恵子、萩 千賀、早瀬広司、井上公雄、泉屋宣志・恵津子、小堀煌治、難波茂雄、道川弘、佐々木武巳、関口健一、園部恭一、曾根モト、霜村耕介・耕一、武沢和義・佐知子、田中金作・礼子、戸津高保・以知子、山田甚子・れい子、柳沢信雄・千代子

〔担当幹事〕 早瀬広司、関口健一

〒064 札幌市中央区北2条西26丁目

福 移

60.7.7

高倉 龍文

私が野鳥愛護会に今年の春仲間入りさせていただき、今日は5回目のそして、草原の鳥とは初めてのお見合いの探鳥会でした。バス停から1.5km程の牧草地を巡る4時間余りのバードロード、天気にも恵まれ、牧歌的な中での数々の鳥達は愛らしい歌声と素朴な姿で出迎えてくれました。いつもながらのリーダー、ベテランの会員の方々の懇切丁寧な説明、アドバイスにより、参加する度に、わずかながらも増えていく野鳥記録を今後も貴重

な財産(思い出)とさせていただきます。又、双眼鏡だけでは詳細に鳥の姿を捉える事は出来ないことを痛感しました。望遠鏡の威力、このふたつを駆使することでますます魅力的な世界に浸ることが出来るのでしょね。

おにぎりを食べながらの皆さんとの野鳥談議も楽しみのひとつです。自然を大切にしたい気持ち、その中での野鳥、草花との触れ合い、採っていいのは写真だけ。このルールを守り今後もお付き合いさせていただきたいと

思っています。ストレスから来る心身障害の根治療法としてのバードウォッチングを周りの方におすすめしては
いかがでしょうか。

〔記録された鳥〕 アオサギ、トビ、チュウヒ、ウズラ、イソシギ、ウミネコ、キジバト、カッコウ、アリスイ、ヒバリ、ショウドウツバメ、モズ、ノゴマ、ノビタキ、アカハラ、シマセンニュウ、マキノセンニュウ、コヨシキリ、オオヨシキリ、ホオジロ、ホオアカ、アオジ、オオジュリン、カワラヒワ、ベニマシコ、スズメ、コムクドリ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、カ

モSP、以上31種

〔参加者〕 園部恭一、谷口登志、木内健司・規子、高倉龍文、堀内 進、伊藤トシ子、萩 千賀、浪田良三、戸津高保・以知子、金上由紀・倫子、清水朋子、曾根モト、竹内 強、宮田 久、佐々木武巳、山田甚一、山田れい子、富川 徹、大坊幸七、玉山 武・久美子、伊藤元一、柳沢信雄・千代子、難波茂雄、岩泉ゆう子、長谷川涼子 以上30名

〒062 札幌市豊平区中の島2-4-1-3

中の島キングレヂデンス



鳥学コーナー

問1 北海道では10月1日から狩猟が解禁になりますが、狩猟の対象となっている鳥類にはどのような種類がいるのですか。

答 鳥獣類の狩猟に関する規制は「鳥獣保護及狩猟ニ関スル法律」に規定されており、狩猟できる鳥獣については、環境庁長官が

- ・ 繁殖力が旺盛で、狩猟登録者に捕獲させても種族保存上支障のないもの
- ・ 繁殖期外は、植物質の餌を主としてとり、限度を越えて繁殖すると農業、林業の経営に害性を現わすものの2点を考慮して定めることとされており、現在、鳥類30種、獣類17種が指定されています。

〔狩猟鳥類〕

ゴイサギ、マガモ、カルガモ、コガモ、ヨシガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、ハシビロガモ、ホシハジロ、キンクロハジロ、スズガモ、クロガモ、ピロードキンクロ、コオリガモ、ウミアイサ、エゾライチョウ、ウズラ、コジュケイ、ヤマドリ、キジ、コウライキジ、バン、ヤマシギ、タシギ、キジバト、ニュウナイスズメ、ミヤマガラス、ハシボソガラス、ハシブトガラス

問2 北海道内では、これまでにどのくらいの鳥が確認されているのでしょうか。

答 道内でこれまでに確認されている鳥の種類は、迷鳥も含めて390種といわれております。

なお、日本全体では、525種の鳥が確認されているとされています。

鳥語一口辞典

アイリング 鳥を識別する場合のフィールドマーク（特徴となる班紋や線）の一つで、目のまわりの輪形の模様をいいます。メジロやケイマフリには白いアイリングがあります。

足環 野鳥の渡りのコースなどを調べるためのいわゆる標識調査に使われる足につける環で、記号番号が刻印されており、これによって装着場所、年月日等が分るようになっています。

アルビノ 色素遺伝子の欠陥により体の一部あるいは全部が白くなる減少でトビ、カラス、スズメ、ホオジロなどに観察例があり、草花にも同様の現象が見られます。

一番子 鳥は種によっては、1年に複数回の繁殖を行い第1回目の繁殖で生れた鳥を一番子、2回目のものを2番子といいます。

ウォーキング 鳥の歩き方で、人間のように両脚を交互に出して歩く方法で、シギ・チドリ類、セキレイ、ムクドリなどに見られ、もう一つの歩き方に、両脚をそろえてはねて進むホッピングがあり、スズメ、ツグミなどに見られます。



〔ウトナイ湖〕

昭和60年11月17日(日)

北から渡り鳥一ガン・カモ・ハクチョウなどが、続々と集まり、にぎやかです。カモの雄は美しく着飾り、雌は地味ながらも上品な色合いをみせてくれます。オオワシ・オジロワシが雄姿を披露してくれるでしょう。

湖岸は予想以上に冷えますので、暖かい服装でお出かけ下さい。

午前10時 ウトナイレイクホテル湖畔側集合

〔小樽港〕

昭和60年12月15日(日)

厳寒の季節です。冷たく荒れる海上で、こんな所にとおもうような岩影で、水鳥達は元気に暮しています。この季節でなければみられない水鳥も多く、カモメ類・カイツブリ類・ウ類・カモ類・アビ類・ウミスズメ類などがみられます。

十分に暖かい服装で、帽子と手袋もお忘れなく。観察はバス利用となりますので、700円程参加費はかか

ります。

午前10時 国鉄小樽駅待合室集合

〔藤の沢〕

昭和61年1月26日(日)

白鳥園では、薪ストーブで暖を取りながら、給餌台に集まる鳥達を観察します。間近で見られます。我家にもバードテーブルを、とお思いの方は、この機会に小鳥の村・小沢村長さんに色々教わると良いですよ。おいしい豚汁もあります。参加費は500円です。

午前10時 白鳥園集合

(定鉄バス定山溪線藤の沢下車 徒歩20分)

〔野幌森林公園を歩きましょう〕

昭和60年11月10日(日)・12月1日(日)

午前9時30分大沢駐車場入口、または午前8時30分百年記念塔前集合

いずれの探鳥会も暴風雨・暴風雪でないかぎり行きます。昼食・筆記用具・観察用具をご用意下さい。

探鳥会についてのお問い合わせは、

道川 011-712-3410まで



◆定例幹事会報告

60年7月3日(水) 18時

30分~20時

札幌市民会館会議室 出席幹事10名

〔審議内容〕

絵ハガキ残部の利用法、及び来年度以降の野鳥写真展の開催方法について話し合いました。

◆定例幹事会報告

60年8月8日(木) 18時30分~20時

札幌市民会館会議室 出席幹事8名

〔審議内容〕

1. 後期幹事会日程について
2. 探鳥会の時の記念撮影について
3. 傷害保険の更新について

◆定例幹事会報告

60年9月4日(水) 18時30分~20時30分

札幌市民会館会議室 出席幹事10名

〔審議内容〕

1. 12月の小樽港及び1月の藤の沢の探鳥会費用について検討し、それぞれ700円、500円とすることとした。
2. 野鳥だよりが毎月200部程在庫が出るため、探鳥会参加者への配布、PR用に関係施設等に配布する方向で再検討することとした。
3. 61年度の写真展の開催場所について検討した。

◆傷害保険の契約内容について

このたび更新した契約の内容は次のとおりです。

- ・死亡のとき 300万円
- ・けがによる入院 1日 3,000円
- ・けがによる通院 1日 2,000円

なお、保険の適用は、探鳥会集合時から解散時までに限られます。

編集後記

前号でお知らせしましたフォトライブラリーに数人の方から写真等の提供があり、早速3コマの写真と2つのカットを使用させていただきました。

写真等がまだまだ不足しておりますので、ふるってご応募下さい。

(白沢)

〔北海道野鳥愛護会〕 年会費 1,500円。(会計年度4月より) 郵便振替 小樽 1-18287

☎ 060 札幌市中央区北1条西7丁目 広井ビル5階 北海道自然保護協会気付 ☎ (011) 251-5465